

第4次大阪府スポーツ推進計画の全体構成イメージ		御意見		全体構成(案)及び骨子案たたき台への反映
めざすべきスポーツ像 スポーツを通じて未来のウェルビーイングを創造する ～全ての人が健康と充実を感じられるまちへ～ ウェルビーイングの向上		委員等	・持続可能性を基本理念としてベースに置き、計画を作る必要がある。 ・持続可能性が基本理念におかれていた万博を開催した大阪だからこそ策定できる計画がある。 ・持続可能性の理念に沿ったものにする。 ・「未来のウェルビーイングを創造する」とあるが、府民の目線になると「作っていく」や「獲得する」という表現になる。 ・「都市」「まち」の関係性をどこかで整理してもいいのではないかと考える。「都市」は政策単位、「まち」は生活実感というような形で使われると思うので、使い分けることでよりマスタープランの精度が上がると感じている。 ・柱のボトムにサステナビリティがあり、それぞれの柱は基本理念にのっとって取り組んでいかなければならない。 ・人と人とのつながりや関係作りがウェルビーイングの向上につながる傾向を示すデータがたくさんある。 ・人と人とのつながりによるウェルビーイングの向上を引き続きめざしていくことが必要。 ・つながりをどのように作っていくか、第4期計画の中にエッセンスとして入れていくのが良い。 ・スポーツの価値が長期的に安定していくような、持続可能性が念頭にある。	・めざすべきスポーツ像を「持続可能なスポーツ都市 OSAKA」とし、基本理念に「1 府が有する資源を活用した持続可能なスポーツ振興」と記載。 ・府全域を対象とした政策範囲を「都市」とし、それ以外を「まち」として整理。
		関係団体	・誰かとつながり、コミュニケーションをとることで、充実感や幸福感を感じる人は多く、私たちの事業の参加者もそうである。まさにウェルビーイング。 ・大阪府の強みをいかした計画となれば良い。	
1の柱 誰もがスポーツに親しむことのできる 社会の実現	1 ライフステージに応じた機会の提供	委員等	・こどものときに運動が楽しいと思える機会、取組みの設定が必要。 ・子どもと大人が同時にスポーツを体験してもらえるような取組みも必要。 ・歳を重ねても身体を動かすことや、身体活動に関して日常に根差したものにできるような場の設定、機会の提供は必要。 ・高齢化社会が進む中で、高齢者の身体を動かす場、集える場を提供していくのが、今後も引き続き必要。 ・実施率の低い層をターゲットにしていくことも重要で、年代層で戦略を変えることも必要。 ・例えば部活動において、自走していけるようなプログラムが必要。 ・20歳以上も大事だが、小中学生や高校生にスポーツを楽しく素晴らしいと実感を持たせてあげるのが大事。 ・部活動指導はとても大事。人材の確保だけでなく、年度ごとにできているか見える化することで、指導者の質を担保することも大事。	・子ども期から運動・スポーツが楽しいと感じ、運動・スポーツを続けたいと思えるような取組みや、世代ごとの取組みを記載するため、子ども期、子育て・働き盛り期、高齢期に分けて施策を記載。 ・「1 ライフステージに応じた機会の提供」にワールドマスターズゲームズ(WMG)について記載。
		関係団体	・ライフステージに応じた機会の提供について、幼児がスポーツをする機会、習慣化する環境づくりが課題と感じる。 ・子どもの頃からスポーツに親しみ、楽しむ経験は重要であり、ゲーム感覚で体を動かすことで楽しさを実感するなど、これがまさに「レクリエーションalスポーツ」。 ・ライフステージに応じた機会の提供について、子供たちとマスターズの融合、ライフステージを超えた機会となればと思っている。マスターズのことについては、我々が協力できるともあるが、ライフステージ横断型の機会をどう捉えていけるかが気になるところ。 ・第4次スポーツ推進計画の軸は、スポーツの裾野をどう広げていき、持続可能にしていけるかだと感じる。例えば、部活動の地域展開などでは、大学生が地域のクラブ活動に参画している様子など、持続可能性を感じる。 ・スポーツへの入り口やハードルを低くして、どなたでも参加できるようにすることが使命。	
	2 パラスポーツの推進	委員等	・障がいのある人のスポーツを特出ししていくのかについて議論してほしい。 ・「すべての人」と表現しているのに、重点項目でパラスポーツを特出しすると矛盾した形になる。 ・パラスポーツをより推進させ、共生社会の実現に向かっていくことが重要。 ・「ともにスポーツ、ともに楽しむ」のような表現がパラスポーツの充実につながる。	・「3 スポーツ環境づくりによる共生社会の実現」にパラスポーツの推進を入れ、インクルーシブの考えをより明確にする。 ・各施策について、めざすべき目標を記載。
		関係団体	・パラスポーツと言うのではなく、インクルーシブスポーツ、インクルーシブな大会をめざしている。 ・それぞれの障がいの程度にあった、また、障がいのある人と健常者が一緒になってスポーツをすることが、ワールドマスターズゲームズにも望まれており、大会のレガシーとして残したい。 ・大阪府の障がいの者スポーツの所管課は、福祉部であり、府内市町村についても大阪狭山市のみ教育委員会が所管、その他は全て福祉部が所管している。スポーツ施策が一元化されてない現状。 ・第3次スポーツ推進計画には、府障がいの者スポーツ大会や全国障がいの者スポーツ大会、障がいの者スポーツ施設のことを掲げているが、めざすべきところが不透明。 ・協会の取組みを、大阪府の取組みと認識してもらっているか不透明であり、どれぐらいの効果を達成してきているのかについても十分確認されないまま、10年ぐらい経過していると感じる。 ・大阪府が協会事務局の人件費を負担するなど、しっかりバックアップしてもらうことが必要であるが、協会事務局人件費はついてない。どこまで我々がやるのか、そもその組織、どんな風に府が考えて、我々が動くのか、もう少し整理されないといけない。 ・各市町村がやっているパラスポーツの取組みを大阪府が吸い上げていくことで、結果として全ての人が健康と充実を感じられるようになるのではないかと。市町村がやっていることを把握し、情報共有して欲しい。府内市町村で障がいの者スポーツにしっかりと取り組んでいる好事例があるので、情報を吸い上げて共有するなど、今あるものを最大限に活かしていくことが大事。 ・市町村の活動をしっかりと吸い上げて、そこから広がりができ、結果として大阪府障がいの者スポーツ大会の参加者が増える形。第4次計画では、全部繋がっているという見せ方をしていたら嬉しい。 ・国が作成している指導案付きのDVDなど、教育に取り入れていくことで、共生社会の実現に向けたスポーツ環境づくりを学校現場からできる。 ・障がいの者にとつてのみならず、支える人、やる人、見る人も含めるかについて、しっかり考えて欲しい。 ・元々パラスポーツ自体が全ての人が楽しめるようにできているので、様々な人にパラスポーツをやっていただくことによって、共生社会の実現につながると思う。 ・パラスポーツを活用することで、パラスポーツのさらなる広がりにつながれば良い。また、パラスポーツを取り入れて、対象者を障がいの者も含む形で実施すれば、生涯スポーツ振興につながる。 ・支援学校では、多くの学校で地域へ学校施設の開放を行っていないようだが、教育委員会等と連携し、放課後デイの人たちが学校を使うことができ、子どもたちが運動できる場になれば良い。 ・しっかりと取組んでいる部分を情報共有することが大事であり、それができていないからやっていないように見える。また、健常者、障がいの者に関係なく、スポーツを選ばなくなってきたことも事実であり、スポーツをしている人をどう支援するのも重要。 ・教育に取り入れたり、様々なライフステージやいろんな方々にパラスポーツを取り入れていただくことで、関わる人が増え、社会全体に広がっていくことでパラスポーツの推進に繋がれば良い。 ・小中学校や高校でも軽度障がいのある児童・生徒が在籍されていると思うので、一緒に部活動やスポーツをすることが理想。しかしながら、どのように実施したら良いか、ノウハウがなくて現場の先生方が困っている場合には、パラスポーツの指導経験のある指導員に協力してもらうなどができれば良い。	
	3 スポーツに親しむ機会の創出と心身の健康	委員等	・スポーツを通した健康づくりが重要。 ・スポーツ推進委員の認知度を高めるなど、ささえる活動を周知することで、ウェルビーイングの向上ができれば良い。	・「2 スポーツに親しむ機会の創出による心身の健康」を重点項目として、スポーツと健康の取組み等を記載。 ・子ども期から運動・スポーツが楽しいと感じ、運動・スポーツを続けたいと思えるような取組みや、世代ごとの取組みを記載するため、子ども期、子育て・働き盛り期、高齢期に分けて施策を記載。【再掲】 ・従来からの「生涯スポーツ」、新たな「レクリエーションalスポーツ」などの言葉について、定義づけを行うなど整理する。
		関係団体	・国は「生涯スポーツ」をよりみんなにわかりやすいよう「レクリエーションalスポーツ」という言葉で表現しようと考えているようだ。 ・「レクリエーションalスポーツ」という言い方で、幅広い世代にスポーツに親しんでもらえる活動が展開でき、府レクリエーション協会が関わり、府民のスポーツ実施率向上に繋がったら良い。 ・子どもの頃からスポーツに親しみ、楽しむ経験は重要であり、ゲーム感覚で体を動かすことで楽しさを実感するなど、これがまさに「レクリエーションalスポーツ」。(再掲) ・スポーツへの入り口やハードルを低くして、どなたでも参加できるようにすることが使命。(再掲) ・第4次スポーツ推進計画の軸は、スポーツの裾野をどう広げていき、持続可能にしていけるかだと感じる。例えば、部活動の地域展開などでは、大学生が地域のクラブ活動に参画している様子など、持続可能性を感じる。(再掲) ・活動を支える方が高齢化してきている課題がある。	

第4次大阪府スポーツ推進計画の全体構成イメージ		御意見		全体構成(案)及び骨子案たたき台への反映
	4 共生社会の実現に向けたスポーツ環境づくり	委員等	・皆が手を取り合い一体感を持ってスポーツを楽しみ、人生をよりよくしていく観点。 ・「ともにスポーツ、ともに楽しむ」のような表現がパラスポーツの充実につながる。(再掲) ・どこでも身体をうごかすことができる事業展開も必要となってくるため、事業同士の連携も図りながら進めていければ良い。	・「3 スポーツ環境づくりによる共生社会の実現」にパラスポーツの推進を入れ、インクルーシブの考えをより明確にする。【再掲】 ・各施策展開を強化する、情報発信について記載。 ・「3 スポーツ環境づくりによる共生社会の実現」にワールドマスタースゲームズ(WMG)について記載。
		関係団体	・活動を支える方が高齢化してきている課題がある。(再掲) ・パラスポーツと言うのではなく、インクルーシブスポーツ、インクルーシブな大会をめざしている。(再掲) ・それぞれの障がいの程度にあった、また、障がいのある人と健常者が一緒になってスポーツをすることが、ワールドマスタースゲームズにも望まれており、大会のレガシーとして残したい。(再掲) ・国が作成している指導案付きのDVDなど、教育に取り入れていくことで、共生社会の実現に向けたスポーツ環境づくりを学校現場からできる。(再掲) ・元々パラスポーツ自体が全ての人が楽しめるようにできているので、様々な人にパラスポーツをやっていただくことによって、共生社会の実現につながると思う。(再掲) ・パラスポーツを活用することで、パラスポーツのさらなる広がりにつながれば良い。また、パラスポーツを取り入れて、対象者を障がい者も含む形で実施すれば、生涯スポーツ振興につながる。(再掲) ・しっかりと取組んでいる部分を情報共有することが大事であり、それができていないからやっていないように見える。また、健常者、障がい者に関係なく、スポーツを選ばなくなってきていることも事実であり、スポーツをしている人をどう支援するのも重要。(再掲)	
	5 スポーツコミッションによる生涯スポーツの推進	委員等	・子どものときに運動が楽しいと思える機会、取組みの設定が必要。(再掲) ・子どもと大人が同時にスポーツを体験してもらえるような取組みも必要。(再掲) ・歳を重ねても身体を動かすことや、身体活動に関して日常に根差したものにできるような場の設定、機会の提供は必要。(再掲) ・高齢化社会が進む中で、高齢者の身体を動かす場、集える場を提供していくのが、今後も引き続き必要。(再掲)	・子ども期から運動・スポーツが楽しいと感じ、運動・スポーツを続けたいと思えるような取組みや、世代ごとの取組みを記載するため、子ども期、子育て・働き盛り期、高齢期に分けて施策を記載。【再掲】
		関係団体	・大阪府にはスポーツコミッションなど、魅力的なスポーツ資源やその他、観光資源もあるので、その強みをいかし、府民が身近に感じることができるスポーツ施策の展開を期待したい。	
2の柱 地域資源を活用したスポーツによる楽しいまちづくり	1 様々な形のスポーツツーリズムの推進	委員等	・スポーツツーリズムでも地域に負担がかからないような方策を考えることが必要。 ・都市とアウトドアアクティビティの現場が近いのが大阪の魅力。	・「1 様々な形のスポーツツーリズムの推進」を重点項目として、府が有する資源を活かしたスポーツツーリズムの展開を記載。
		関係団体	・スポーツツーリズムの推進について、今までは1箇所での大会開催が当然であったが、オリンピック・パラリンピックも広域で実施するようになってきている。ワールドマスタースゲームズも関西全域での広域開催となるため、大会参加者は関西各地を周遊することになるため、産業や各市町との連携ができるようになる。	
	2 スポーツコミッションによる活力あるまちづくりの推進	委員等	・プロスポーツが盛んであることが大阪の大きな武器。	・「2 スポーツコミッションによる活力あるまちづくりの推進」を重点項目として、府が有する資源を活かしたスポーツツーリズムの展開を記載。
		関係団体		-
	3 産業連携等によるスポーツを通じた地域の活性化	委員等		-
		関係団体	・国では「スポーツへの投資」というキーワードが出ていると聞いている。我々もレガシーとしてスポーツ大会時には産学官連携しながら、「スポーツへの投資」を図っていく。	
	4 大規模スポーツイベント等の開催による賑わい創出	委員等	・大規模スポーツイベントやワールドマスタースの周知。 ・ワールドマスタースゲームズについて、柱にあげるのか、項目にあげるのか、ワールドマスタースゲームズという言葉を使って計画のどこかにあげてもいいようなイベント、今後検討が必要。	
		関係団体		-
その他		委員等	・つながりやコミュニティの部分を可視化していくことが必要。 ・居場所を創るというのは抽象的であるが、数値的データがあれば、より大阪府の施策が進んでいると全国に発信できる。 ・「つながる」は、がちがちではなく緩やかな一体感みたいなイメージ。 ・ウェルビーイングの向上につながる発信の仕方の工夫。 ・自治体との連携をとっていけるような方針を示す。 ・各市町村の状況を知ること、地域住民が他自治体と交流ができるような計画を策定できたらと思う。	・各施策展開を強化する、情報発信について記載。【再掲】
		関係団体	【競技力】 ・大阪府がアマチュアスポーツに対してどう考えているのかという理念概念と合わせて、予算をどう考えているのかが、競技団体から問われている。 ・競技団体からすると、選手には良い成績を収めてもらいたいと思っているので、強化費は一定必要。 ・他自治体の一般的な強化費は、保体課からいただいている強化費と、大体1桁から2桁ぐらい違う。 ・大阪がなぜ国スポで成績を収めているかというと、高校生が全国から集まって私立が頑張っているから、点が取れているだけ。 ・地べたの作業としてアマチュアスポーツをどう考えるのか。 【施設】 ・ハード面について、部会の中でデータも出していない。国の計画策定資料では、バックデータとしてスポーツ施設の整備状況がついていた。データすら出さないので議論にならない。まちづくりを大阪府としてどう考えるのか。本来は、部会のオブザーバー等にも大阪都市計画局に入ってもらうべき。人口当たりどれだけの施設が、どれぐらいの規模で、どれだけ住民の方に提供できているか、議論をする上で示すべき。 ・計画や施策について、ソフトの部分だけしか書かれていない。ハードはどうするのか。 ・まちづくりの地域活性化で、今回「する」「みる」「支える」に加えて「集う」というワードが出てきたところだが、府がしようとしているのは、スポーツツーリズムのインバウンドを呼んでくるソフトの部分だけになっている。 【施策】 ・保体課との事業被りがあるが、どのような整理なのか。例えば年齢層で分けるとか、ジュニア強化にするとか。 ・20歳以上の週1回のスポーツ実施率について、50%程度であるが、もっとスポーツに親しんでいる人がいるのではないかと印象。委員が発言されていた緩やかな形でスポーツ・運動を実施している人は多く、それは数字には表れていないのではないかと感じる。 ・府民が、自分も関わっている、つながっていると感じるができる計画が理想。府スポーツ推進計画が、自分とどうつながっているかを感じてもらうためには、この計画の情報発信はとても大切。 ・スポーツをあまりしていない人にどのように計画、つまり、スポーツ施策をどのように届けるか。このリーチの部分が、ワールドマスタースゲームズでもすごく難しいところ。 ・スポーツ施策の一元化が大事。	